

國學院大學学術情報リポジトリ

竹内式部の学問形成について：『啓蒙辨』を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大貫, 大樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001069

竹内式部の学問形成について―『啓蒙辨』を中心に―

大貫 大樹

はじめに

竹内式部（正徳二（一七一二）年～明和四（一七六七）年）は所謂、宝暦事件の中心人物としてその名が知られている。事件の経過や宝暦期に於ける彼の事歴については、星野恒『竹内式部君事蹟考』（富山房、明治三十二年）や、徳富蘇峰『近世日本国民史 宝暦明和篇』（民友社、大正十五年）をはじめとする戦前の研究に詳しい^①。ただし、宝暦以前の事については史料に乏しく、不明な点が多い人物である。

宝暦事件以前の式部について論じた研究として挙げられるのは、新潟時代の式部や父母妻子など、彼の家族について、菩提寺の本覚寺に蔵せられた史料から考証された、吉田東伍「竹内式部の父母妻子」（『越後之歴史地理』万松堂、大正十四年所収）や、藤田福太郎『郷土之偉人竹内式部先生』（新潟市青年団聯合会、昭和十一年）が挙げられる。

殊に宝暦以前の式部の事歴として、閑却出来ぬのが望楠軒との「義絶」であるが、その間接的要因こそ、三宅尚斎

一派との神儒論争であつた。⁽²⁾ただし、この論争に於いて、式部が如何なる心情と意志を抱いていたのかは、未だ検討の余地が残る。この点を明らかにする事は、式部と望楠軒の「義絶」をめぐる背景を、より明瞭ならしめる事となるであろうし、青年時代の式部の思想を見る上で必須の作業と考える。

なお、この論争について論じた研究は、元文期に於ける式部の思想を検討された松本丘「竹内式部の『日本書紀第一講義』」（『垂加神道の人々と日本書紀』弘文堂、平成二十年所収）のみである。同研究では、神儒論争並びに、天理大学附属図書館吉田文庫に蔵せられた『日本書紀第一講義』を検討され、元文期に於ける式部の垂加神道家の位置付けが、「京都に於ける垂加神道派の旗手として自他共に認める存在であつた」事を明らかにされた。その式部の学問も、「その根底は若年期の修学、特に若林強斎・玉木葦斎・松岡雄淵より伝えられた所によって形成されたもの」（二五四頁）としておられる。

これらの諸先学を踏まえ、本稿では式部と三宅尚斎―久米訂斎との間で起きた論争を軸に、青年時代の式部自身が如何に自らの学統を自認していたのかを明らかにする。論争内容を検するに式部は先学の指摘する如く、玉木正英や望楠軒の教導により学問の素地を固めていたが、殊に後者の影響は強く、式部は自らを闇斎―浅見綱斎―若林強斎に連なる神儒兼学の学者と自認して、論争に臨んでいた事が考えられる。この検討を通じて松本氏の研究に少しく蛇足を加えつつ、未だ不明瞭な点の多い竹内式部の伝記研究、並びに学問形成の様相についても明らかにし、彼の思想史的研究の補充としたい。そこで先ずは、先学によりながら上京直後の式部と彼の仕えた徳大寺家について概観しよう。

一、上京後の式部と徳大寺家

竹内式部は正徳二（一七一二）年、越後新潟で医業の家に生まれた。式部の菩提寺である本覚寺（現新潟県新潟市）に建てられた墓には「正庵竹内省敬先生之墓」とあり、側面に「享保十三年戊申秋七月廿四日孝子竹内宗栓建之」とある。宗栓とは、式部の父であり、省敬とは、式部の祖父を指す。この墓は父宗栓が建てたとされている。なお、竹内家は累代の家長をして宗栓と名乗った様である。⁽³⁾祖父省敬をして「先生」と敬称を附している事を見るに、当時新潟に於いて、竹内家は学者気質の家として、人々からも認知されていたのであろうか。後年、式部が奉行所にて糾問された際、没収された書物の中には、「徳川記と申反古同然之書物、私亡父写置候写本」（『糾問次第』前掲星野所収、七頁）とあり、父宗栓もまた、好学の人であつた事が察せられる。父の医業を継ぐことを目的に、式部は学問を始めたと考えられるが、その素養は父のもとで上京以前から養われていたのではなからうか。

また、上京後の式部を支えた人物として、閑却出来ぬのが彼の母と妻である。吉田東伍氏は式部の菩提寺である本覚寺に蔵された、京都本覚寺の僧侶・日厚が新潟の旧家にして「相当の財産を持つて」いたという、大塚家に宛てた書状を検討された。同研究によれば、式部の母と妻しづは大塚家と極めて、親交の厚かつた事が分かる。

その式部が医業を修べく上京したのは享保十三、四年、彼が十七、八歳の頃である。上京後直ぐに学んだ人物は久米訂斎と望楠軒の沢田一斎であつたと考えられる。その後、式部は享保十六年に松岡雄淵に学び、翌年に易簣した望楠軒講主若林強斎にも学んでいた。

一方、式部は当該期に於いて、強斎と並ぶ垂加神道の碩学玉木正英にも学んでいる。式部の玉木入門の時期は定かでは無い。ただし、神道を本格的に学ぶ前の式部は、享保十八（一七三三）年二月二十一日に垂加神道家に於いても

重んぜられた易学伝授を、三宅尚斎の弟子北澤遜斎から受けていた。^⑤

なお、雄淵は同年十月、『神道学則日本魂』の出版をめぐる過程の中で正英に破門されているが、易学伝授を式部が受けた頃は未だ雄淵は破門状態ではなかった。これらを鑑みるに、式部の正英入門時期は享保十八年の二月二十一日から十月までの間ではなからうか。かようにして式部は垂加神道・崎門学の碩学らに学び、修学を進めた。

ところで、『近衛内前公記』（『宝暦事件 四』宮内公文書館所蔵）宝暦八年七月十八日条によれば、

竹内式部自遠国上京仕、三十年余已前ニ徳大寺家之僕となり、彼家ニ勤仕経年序ハ兼学神道之儒者ト相成候、

上京後、直ぐに徳大寺家に仕えた如く見えるが、如何なる伝手によるのか、定かでない。考えられるのは正親町家の存在である。式部は沢田一斎より一通り儒学を学んだ事から、享保十八年に正親町実連へ『小学』を講じていた。^⑥式部が徳大寺家と何らかの関係を持ったとすれば、正親町家を介してと考えるのが穏当であろう。

さらに、式部と徳大寺家との関係上、注目したいのが彼の名乗った「式部」の名である。嘗て、式部が親しく学んだ一斎は、「先年出会いたし候竹内一学（只今式部と変名）」（宝暦八年八月三十日付小野鶴山宛書状）という。^⑦元文四（一七四〇）年三月に講じられていた『日本書紀第一講義』や、上述した吉田氏の研究で明らかとなった日厚の書状のうち元文五年三月十四日のものにも「一学」の名が見える事から、元文期はこの名が通名であった。吉田氏が明らかにした書状の内、式部の母が大塚氏に宛てた書には「式部」の名が見えている。この事から同氏は彼が「式部」を名乗った時期を「寛保延享の間の事」としている。事実、『公城卿記』（東京大学史料編纂所蔵徳大寺家本）延享三年正月十九日条には「竹内式部来、日本紀講尺、今日依講尺始」とあり、「式部」と名乗っていた。

なお、後年、式部が語ったところによれば、「徳大寺家御先代より御身近く相勤候得故、一器一物、御文庫之内能存罷候」(『糾問次第』五頁)とあるから、彼が徳大寺公城の父実憲の頃より仕えており、浅からぬ関係であった事は間違いない。その実憲の薨じたのは、元文五(一七四一)年七月十六日であった。

この点を踏まえ、「式部」の名として、参考となるのが近世後期の歌人香川景樹である。景樹は徳大寺家に出仕する歌道宗匠家香川梅月堂の景柄へ養子に入った。その後、景徳、ついで景樹と名乗り、通称として「式部」を称している。⁽⁸⁾後年の香川景樹の事例ではあるものの、彼が徳大寺家に出仕した頃から「式部」を称した事を踏まえれば、竹内式部もまた、「式部」と称したのは、実憲に仕えてからではなからうか。然りとせば、式部は元文五年三月頃から、実憲の薨ずる同年七月十六日までの間に、徳大寺家へ正式に出仕した事が推定出来よう。ただし、その前提には、以前から式部が同家と親しく交わりを持っていた事で実憲より信任を得ていたと考えるのが自然であり、その関係を作ったのが正親町家であろう事は既に述べた。

なお式部は、『糾問次第』に於いて、

且私徳大寺殿にて何程禄を給り候哉被_レ尋候故、扶持をも不_レ被_レ下候段申上候へハ、然らハ家来分と申者哉と御尋故、前年(筆者註―宝暦七年)三四年之間、御近習相勤候節者、四石ツ、被_レ下、其後禄ハ不_レ被_レ下候得共、其分ニ而近習格ニ只今ニ而も御召使之段申上候、(一一頁)

とある如く、徳大寺家より扶持を受ける事は無く、公城が近習を勤めてから三、四年の間は四石ずつ受けていたものの、それ以外は特段、同家からの収入はなかった様である。では、式部は何故、自らの仕えた徳大寺家より扶持を受

ける事をしなかったのか。『糾問次第』にて式部は、「大名衆ハ拾万石廿一万石ノト取り大ニ遠候処を見候ヘハ自然と堂上方は日に衰ヘ、武家は日に盛ナ様ニ相見ヘ申候」(三二頁)という。当時の徳大寺家の家領は約四一〇石、清華家の中でも、醍醐家(約三一二石)、大炊御門家(約四〇〇石)に次いで低く、式部の主人が「日に衰ヘ」ていた事は間違いないだろう。かような、姿を目前としていた事から式部は徳大寺家より扶持を求める事をしなかったのではなかろうか。

抑々、上京した式部が学問を進め、さらに自らの仕える徳大寺家より扶持を受けずとも、後に京都で一家を為す事が出来た背景として、彼の母と妻が親しく交わった大塚家からの援助のあった事が察せられる。また、式部は元文期には既に初学者へ向けて、『日本書紀』講義を行っており、延享二年には佐々貴各衛好門なる人物へ垂加神道の伝授を伝えていた事が『日蔭草』(皇學館大学久保田収文庫所蔵)^⑩より窺える。次第に式部のもとには学を乞う者も増え、宝暦八年時点で、「地下門人諸国に何程有^レ之候哉と被^レ尋候故、七八百人程有^レ之由申候」(『糾問次第』一六頁)に至った。式部にはそうした門人らの支えがあった事も十分考えられる。

以上、上京直後の式部について、少しく補充を試みた。式部は母や妻の支えもあって、学問を行える環境下にあった。一方で式部は自らが仕える徳大寺家の「日に衰ヘ」た姿を目前として、扶持を取る事はしなかった。その背景として、彼がこの頃までに受けた学問の存在は閑却出来ぬが、親類や地下門人らの支えが同家より扶持を強いる必要のない環境を齎していた事も念頭に置くべきであろう。以上、上京後の修学模様を踏まえ次節では本題である三宅尚斎、久米訂斎との間で交わされた論争の内容について概観したい。

二、三宅尚斎・久米訂斎との論争

論争勃発の直接的原因は式部が元文三（一七三八）年に訂斎を訪れ、不易なる道について論じ、これに対して、訂斎が道には流行があると斥けた事に端を発する。¹²ただし、何らの所以もなく、式部が先輩である訂斎に議論を持ちかけたとは思えない。そこで注意したいのは、後に論争相手の一人となった三宅尚斎の『默識録』に見える以下の言である。

若林^{七所}所録綱斎先生仮名大学口義。元文元年丙辰歲。偶得之看過。以余見之。言語堆。而皆朱子之常談。要義則却麤脫。其味短。甚不似先生所自筆大学弁之有意思精密。以是識得若林所見。未至于其微意。宜乎彼晚年狼狽焉。¹³

尚斎は強斎が録したという浅見綱斎の「大学口義」を元文元（一七四〇）年に偶然、見る機会に接したという。なるほど、朱子の「常談」は記されているが、肝心な部分の記録が粗雑であり、精密な学問をされた綱斎先生の「大学弁」とは、似ても似つかない。記録した強斎は、綱斎先生の微意を全く知らぬもので、彼は「晩年狼狽」の様であったと評している。なお、綱斎門と尚斎との関係については、同書にて以下の如く見える。

綱斎先生無嗣。没後綱斎先生兄道哲嫡男勝太郎。為喪主受弔礼。且定為三年喪。故門人等尚云。以勝太郎為養子。直方先生以書質於重固曰。以姪為後。以若林某佐之。欲繼学脈統諸門人。皆是俗習之陋事實。此事果然否。

重固亦謂。以姪為後固可矣。然勝太郎是兄之適子。而為父之弟之後。大可疑。繼學脈統門人。是最可疑。後質之於山本源藏。實壬辰七月二日渠曰。綱齋先生臨絶時。無一言及繼嗣。反復懇懇。唯勝太郎之勤苦繼學脈之言而已。書籍并武器。付勝太郎。家宅及什器寄道哲。重固云。綱齋先生義理精審。固当如此。外人不知其詳而議之。不得其実其宜矣。因識山本之言如此。庶幾後之議者知之。⁽¹⁴⁾

正徳元（一七一二）年に綱齋が易簣すると、彼の兄道哲の嫡男勝太郎が喪主となり、後事に勤めた。この件につき、佐藤直方は綱齋が勝太郎に後事をさせ、その上、学脈を継がせて強齋をその補佐に当たるよう命じたと聞くが、卑しき事であると評し、その実際について尚齋へ問う。これに対して尚齋は、甥が後事を勤める事は問題では無いものの、勝太郎が父の弟にあたる綱齋の後事に勤めるというのは疑うべき事であり、さらに学脈を継がせるという事も大いに疑うべきである、とする。

故に彼は、強齋同門の山本復齋に問い質した。復齋によれば、綱齋は臨終の際、継嗣については言及せず、勝太郎の学問大成を期待するのみであったという。そこで綱齋は強齋に対し、その後見となるよう遺命したのである。⁽¹⁵⁾尚齋の言う如く、「義理精審」なる綱齋の学風のままに、彼の後事は進められた。

『默識録』の記述からは綱齋を篤く尊敬した尚齋⁽¹⁶⁾が、綱齋門と親しく交わり、またその動向について注意深く見ていた事が窺える。かような尚齋であった事からこそ、強齋の筆記録には満足出来ぬところがあり、粗雑であると評したのであろう。その時期は元文元年、式部が訂齋を訪れる二年前であった。綱齋の後事について尚齋が復齋を問い質した事を鑑みれば、強齋の筆記録を見た彼は望楠軒に対し、自らの意見を伝えていた事は十分考えられる。

一方、望楠軒に於いて、強齋の師風が重んぜられた事は言うまでもない。だが、その師である綱齋、さらに学祖闇

斎に直接、教えを受ける事の出来なかった当時の望楠軒にとって、闇斎―綱斎に学んだ尚斎からの忠告は同学の先輩による助言として、尊重していたと考えられる。⁽¹⁸⁾

かくも綱斎を尊敬する尚斎ではあるが、最晩年の綱斎も学んだ神道については、晩年になるにつれ否定的であった。それにも関わらず、強斎をして、綱斎の「微意」を知らぬ者と評する尚斎の態度⁽¹⁹⁾を、式部は風聞した事で彼の学問に対し、不信感を抱いたのではあるまいか。そこで式部は尚斎の学問を窺うべく、彼の娘婿で嘗て学んだ久米訂斎を訪れたのであろう。しかし、訂斎では埒が明かぬと考えた式部は当の本人である三宅尚斎へ書状を送り、論争は本格化した。以上が論争に至る経緯であったと考えられる。この論争は尚斎歿後も訂斎との間で交わされ、延享三（一七四六）年の八年間の長きに亘って行われた。かくの如き論争の背景を踏まえ、式部と尚斎、訂斎との間で交わされた書状を収めた『啓蒙辨』（『日本儒林叢書』一二、鳳出版、昭和四十六年所収、以下引用訓点・句読点ママ）から、注意すべき意見の相違点を確認しよう。

元文三年三月十二日付の尚斎宛式部書状の冒頭、『日本書紀』に基づき天地開闢から、天照大神の御即位までを説き、

土之血脈ヲ続カシメ此国ヲ治メシメ給フ也。故二百王天地ノ血脈ニシテ。天位一度立テ不_レ変_ニ故天子ノ徳ヲ別テ以テ敬者ハ。土シマルハ吾国帝王固有之徳ナレバ也。異国篤恭而天下平ニ似タリ。是万国道ハ天ニ本クトイヘトモ。殊ニ吾国ハ天人唯一ノ実体ト申スモ。サル事ノ様ニ被存候。

「土之血脈」とは、「土金之伝」に基づくもので、決して放心せず、人として我が身をしっかりと立たせるのが

「敬」^{つし}である事を説いた教えである。この教えを根本にして国を治めるが故に、我国の「天位」は不動である。「敬」は「吾国帝王固有之徳」と言えよう。まさに君子の「篤恭而天下平ニ似タリ」(『中庸』)である。道が「天」に基づく事は万国共通であるが、殊に我が国に於いては、「敬」の教えのまま神代より今日(人代)に至るまで、一貫しておりまさに「天人唯一ノ実体」である。

そうは雖も、漢土、朝鮮、我国にはそれぞれ「相応ニ道ヲ立テ教ヲ立テ其国ヲ治メ給フ」のであるから、式部としても「吾国ノミ道アリテ異国ハ道ナキト申ス事ニテハ無之」という。ただし、確かに我国には「上古ヨリ語り伝へ候」道がある(以上、三、四頁)。

其ニ尊ノ御血脈万万世迄相統候故。勿論不徳之君モ有之候故。盛衰治乱モ有之候ヘトモ。冠雖古不_レ加_レ足。綱常立貫候事。真ニ天地之宗子者而。禪讓革命ハ上古ヨリ何事ト云ヲ知ラサル国風ニテ御座候。異国ノ解処モ天出_ニ圖書而伏羲禹王則_レ之。文武周公孔子ニ至リ其言盛ニ其道具候事。可_レ仰可_レ貴トイヘ共。其国ノ実ハ禪讓放伐ノ大變ヨリ。遂ニ中国夷狄之有トナルモノ。豈是ヲ以テ道トシ給ハンヤ。只三綱五常直立而万古中五ノ不動ヨリ。泰伯文王ヲ至徳トイヒ。武未_レ尽_レ善ニテ。此道不落_レ地様ニ被_レ存候。(四頁、傍点筆者以下同じ)

二尊の血脈を受け、初代天子天照大神の御子孫にあたる「天人唯一ノ実体」として、天皇はいらっしゃる。不徳の君も居られたし、国内は乱れた事もあったが、それでも天位は変わらず、三綱五常は上古を貫いている。故に禪讓革命を知らぬが我が国の「国風」である。式部は皇統が神代より「万万世迄相統」てきた我国の歴史的事実を「天人唯一ノ実体」である天皇の存在から確信しており、儒学の普遍的な論理が我国の「国風」に適合せぬ事を説いた。

対して漢土の書物には伏羲、禹王の聖代あり、文王、武王、周公、孔子と道を備えた賢人もいようが、禪讓放伐が行われてきた。結果として、国は夷狄に奪われてしまう。彼国の姿を見て、真に道があると言えるであろうか。ただし、漢土でも三綱五常は不動である事は、孔子が泰伯と文王を「至徳」とし、武王を「武未_レ尽_レ善」とする言からも分かる。彼国の道も地に落ちたとは言えない。何故なら、「是垂加翁ノ各国各自有_レ道テ其道有_レ妙契者存焉」(同前)と、各国にそれぞれ道があつて、禪讓や放伐が時として許される漢土と、それを知らぬ「国風」である我国との間に相違があるうとも、本来、人の行ふべき道は、国が違えど通ずるものと、闇斎の説いた「妙契」の論を以て、我国の道を弁じた。

対して、「久米氏ノ吾国ノナリガスグト動ト御申候ニヨツテ相考得ハ、禪讓革命モ直立而不_レ動道ト御申候意ト相見ヘ候」(四〇五頁)と有る如く、普遍的なる儒学の教えに立てば訂斎は君位が動く事は世の常であるから、禪讓革命は当然、我国でも起こるものという。

式部は訂斎の革命論に対し、「中庸或問ニ禪讓革命迄ヲ中トツメラレ候ハ。中ノ字ヲツメテ論スル」(五頁)と、「中庸或問」にも禪讓革命について「中」に注視し、論じられているのだから、やはり「中」に注視して論ずる必要がある⁽²⁰⁾だろうという。その上で「君臣大義ヲ以テ論スル時ハ。万古孔子ノ未ノ一字ガ綱常ノ立処」と、「武未_レ尽_レ善」の言こそが、君臣の大義を論ずる上で重要とした上で、尚斎に「御教示奉願候」と乞うた。最後に、

然ルニ吾国治世久シク若_二孔子_一之聖人無_二出生_一此道ヲ發明シ導_レ人垂_レ教給_レフ人無_レ候歟。漸帝王之実録ニヨツテ相考候迄ニテ候得共。中古迄ハ上古ノ風俗ニテ道行_レ教モ立_レ候得共。保元ノ乱ヨリ太平記ノ乱ヲ歴テ。漸王室衰候故。於_レ今欲_レ行_二吾道_一者。言可_レ則ナク。書ノ可_レ考ナキヲ歎キ候処ニ。四書六経渡来。垂加翁御出生ニテ。只

今如^レ何^レニ被^レ行候事。則チ皆天神ノ命ト被^レ存候。悉クハ吾国ノ風俗ニ不^レ叶処モ有之候得共。小大学ノ教ヨリ出処進退治国平天下ノ道ニ至テハ。天ノ覆ヒ地ノ載ル処。如^レ此審而且尽シタル書ハ之有間布ト被^レ存候ヘハ。今於^ニ吾国^一志アルノ士棄^レ之テ。イツクニヨリ可^レ申ト被^レ存候。故ニ不佞モ御門下ニ連リ立^レ身行^レ道度奉^レ存候。乍^レ憚^レ垂加^レ翁ノ於^ニ聖学^一挙テ不^レ棄^レ給^レ処モ。是等ノ様ニ被^レ存候。然^レヲ先生以^ニ垂加翁^一不^レ得^レ聖学之藎奥^一ト被^レ仰候処。於^ニ不佞^一未^レ安処ニ候間。猶又御教示被^レ遊可^レ被^レ下奉^レ願候。(五頁)

「帝王之実録」(『日本書紀』)に拠りながら、我国の治世の有り様を見るに、中古までは我国の道や教えも立っていたが、保元の乱に始まる戦乱によつて世は乱れ、果てに王室が衰える事になったと嘆く。だが四書六経が伝来し、さらには「垂加翁」こと闇斎も現われる。それらは、「天神ノ命」によるものである。

経書は我国の風俗に合わぬ所があるにも関わらず、これらに記された「出処進退治国平天下ノ道」は、あらゆるものに通ずると言つて、志ある者が「天神ノ命」の教えを棄て、彼国の道を揚言するのは何故なのか。儒学にも励む学徒として式部は尚斎に対し、かくの如く問うた。「今於^ニ吾国^一志アルノ士」とは、尚斎―訂斎へ向けられているのであろう。対して、尚斎は以下の如く式部へ返している。

堯舜ニ禅譲アリ湯武ニ放伐アリテ：其孔子ノ口ヨリ湯武革命ヲ順^ニ乎天^一応^ニ乎人^一ト称シ給ヘハ。此処微意アルコト見ルヘシ。聖人ヲ信セスンハ已ヌ矣。今我邦幸ニ皇統万万世カハラセ給ハヌヲ主張スルヨリ。湯武ヲ主弑ノ賊ト云フノ徒ハ。挙テ齒牙ニ掛ルニ足ラス：夷狄偏国ニハ各別ニ他ニマサルコトアル。猶蛭ノ自照ラシテ人ノ燈ヲ待ニマサリ。狐ノ能ク人ニ依ル之類。偏氣ノ勝ツ処。一路の明他ニスクルルコトアルモ。亦其理也：豈区区タ

ル小道二心ヲ寄せ身ヲ立ルコトヲセンヤ。(七頁)

堯舜の禪讓も湯武の放伐も「天命」に従う事で、人心に応じたのである。聖人の言によれば君主が流転する事は、世の常であり、我国をしてそれは当らぬと説き、湯武を悪人の如く説く者は、話にならない。皇統不易を神道に依拠して、殊更に揚言するのは、夷狄にも優れた所があると言つて、螢が人を照らし、狐が人に憑依する類のものを傲語するようなものである。かような「小道」(神道)では到底身など立てられぬ、と尚斎は説いた。かくの如き神道に對する言説とは、「日本ハ只神道妙用ニナガレテ浅陋ノ学」、「唯欄宜山伏ノナリトミへ、火ヲ忌テ願ヲ立テ、マモリヲサゲル、狐ヲヲトスナド、云ヤフナル、ウバカカノ云ヤウナル事ヲ大事ト覺ユル、ミナ神ノ字ヲ以テ主トスルノ弊ナリ。山崎先生トイヘドモ、此弊ヲ不免⁽²¹⁾」と、説いた壮年期に於ける綱斎からの感化によるのである⁽²²⁾。

これに對し、式部は反論した如くであるがその書中、自国を「中国」と称する事は、「是綱斎先生呼称弁ニ説給フ処ナリ」(一一頁)と、尚斎が敬慕する綱斎の言を掲げ、彼の認識を問うた。以後、尚斎の返書は『啓蒙辨』には納められてはおらず、これを以て両者は交わりを絶つたと考えられる。尚斎は自身が、綱斎の意を知らざるが如き、挑発的反論をする式部に對して強い憤りの念を持ち、返答する氣も失せた事が察せられよう。

尚斎の学問に不信感を抱いた式部は、彼の学問を窺うべく、久米訂斎を訪れる。しかし、訂斎の返答に納得出来ない式部は尚斎と直接、書を交わした。この時、式部は神道に依拠しながら、我国に於ける禪讓放伐を否定し、尚斎—訂斎は儒学專一の立場を堅持して、これを是とする。両者の議論は平行線を辿った。ここで、注意したいのは、青年時代の式部が依拠する学説と自らの立場を如何に自認していたのか、という点である。次節では先ず前者について確認しよう。

三、依拠した先蹤学説

式部が書中で掲げた文言中、特に注目したのは、「天神ノ命」に関する説である。加えて、儒学方面についても、彼の依拠した学説を確認する必要がある。ここでは、『論語』八佾篇に見える孔子の言、「武未_レ尽_レ善」に注目したい。参考として、式部の学問にも多大な影響を与えていた綱齋⁽²³⁾の説を確認しよう。

綱齋は『拘幽操師説』に於いて、

殷紂ガコトハ誰知ラヌ者モナイ暴虐ノ天子、ソレヲ天王聖明トアリ、文王ハ却テ臣罪当_レ誅トアルハ、カイトツ
 テスマヌコトノ様ナガ、文王ノ心ヨリ見レバ、親子一体ハエヌキノイトヲシイ心ヨリ外ナイ如クユエ、是ヂヤノ
 非ヂヤノトクラベルコトハナイ。順_二天命_一応_二人心_一ノ權道ヂヤノト云フガ、此ノ心カラミレバイマ／＼シウテド
 ウモナラス。コ、ガ文王至徳ノ処ニテ、武未_レ尽_レ善処、天下万世臣子ノ目アテ是ヨリ外ナイ。(六七五頁)

とする。また、綱齋の講じた『論語師説』（国士館大学楠本文庫所蔵）では、「湯武ノ筋ガヨイト云ハ必其身ハ君ヲ弑スル筈ゾ」と弟子らに警告した。右に明らかな如く、禪讓放伐を否定する式部の「武未_レ尽_レ善」に対する解釈は、闇斎―綱齋と同様であった。

さらに式部は「武未_レ尽_レ善」の説を挙げる前段に、天地開闢以来、盛衰はありながらも、皇統が万々世まで続いている我国の「国風」と、聖人賢人が生まれようとも、禪讓放伐を繰り返す漢土の「国風」との相違を示した。その上で「中」と「君臣大義」の問題を提起し、「天神ノ命」の大事を説く。ここで、式部は武王が順じた「天命」とは異

なる「天神ノ命」こそが、我国の「天ノ覆ヒ地ノ載ル」もので、「出处進退治國平天下ノ道」に通ずる事を説かんとしたのであらう。この教えを詳らかに記したのが、「帝王之実録」（『日本書紀』）であり、四書六経と共に同書を考究し、その教えを示したのが学祖關斎に他ならない。上述した如く、式部から言わせれば、關斎の『日本書紀』考究もまた、「天神ノ命」の冥慮によって行われたものであった。その關斎によって示された、「天神ノ命」と「中」の説とは如何であつたか。曰く、

嘉聞^レ之。中者、天御中主尊之中、此為^二君臣之徳^一。此祓、述^二君在^レ上治^レ下、臣在^レ下奉^レ上。而不^レ号^二君臣祓^一者、以其徳^二称^レ君、而表^二君臣合体守^レ中之道^一以号^二中臣祓^一者也。（『風水草』『神道大系 垂加神道』上、神道大系編纂会、昭和五十九年所収、五頁）

關斎は天御中主尊より万物に命の根源である「心神」は賜るとい²⁴う伊勢神道の神学を承けていたが、「心神」をして、ここでは「中」としており、「君臣之徳」とした。君は御自身の責務として、「中」（君徳）を守る事で「中」を遺憾なく發揮せられる。故に、「中」即「君」である。臣下は自らの「中」（君）を御護りする事で、自らの「中」を發揮した事となる。式部の師若林強斎は「中」をして、

中ト云ハ、神道者ハ動カヌコトヲ見テ、アソコニ一ツウゴカヌ本然ノ本体ガアル、ソレヲ中ト云コトゾ、儒者ハ云中モ、丁度イヤトモヲウトモ云レヌ、タゞ中ノコトヲ云ヘバ、アレガソコニソフナフテ叶ハヌ、動ヌ所アルカラゾ、何ゾカハルコトガ有フハツガナイ、カハレバドチラゾガソデナイゾ、ソレデ神道ハ儒書ヲシランニヨリテ

ソデナイト云、儒者ハ神道ヲ知ラヌニヨリテソデナイト云ゾ、(「望楠所聞 乾」金本正孝編『強斎先生語録』溪
水社、平成十三年所収、五六～五七頁)

「中」「心神」とは不動であるが、本来は儒学に於ける「中」も不動である。この点について、参考となるのが、以下の言である。

文王ノ拘幽操ガ神道ノ至極ゾ、桀紂ガ様ナ者有フ様ハナイガ、ソレ(ガ)真実ニイトフシイト云デナケレバ、道
ハ語ラレヌゾ：唐ノ書尊バフト天竺ノ書学バフト、真モノト云モノ、コレガ大和魂ゾ、(同前、一一頁)

強斎は臣としての分を全うした文王とその姿を記した『拘幽操』をして、「神道ノ至極ゾ」とした。その所以こそ、「中」である。漢土の先哲ではあるが、文王は自身の「中」「天命」を全うし、「イトヲシイ心」(『拘幽操師説』)で紂王に忠義を尽くした。ここに文王の「至徳」たる所以があり、武王の「未_レ尽_レ善」事が明瞭となろう。漢土に於いても、文王の如く臣としての不動なる「天命」「中」を守った先哲は居り、その代表的人物こそ、浅見綱斎による大著『靖献遺言』に列せられた忠臣八人であった。

一方で「天命」の哲理とは臣の分を越え、禪譲放伐による革命も時に許される事もまた必定であった。故に漢土に於いて、「君臣大義」と帝位とは常に不安定なのである。そうした哲理は日本の「中」「心神」には通用しない。強斎によれば、「中」のままに生きる者こそ、仮令、儒者であろうと、僧侶であろうと「大和魂」を堅持したものであるという。

『靖献遺言』について附言すれば、式部も「天命」によって、忠孝一致に努めた先哲の姿からは多大な影響を受けていた。²⁶⁾ 同書の内容を熟知する式部であるからこそ、彼らの如き先哲が、「聖学」発祥の地である漢土に於いて実は稀な存在であり、「其国ノ実ハ禪讓放伐ノ大變ヨリ。中国夷狄之有トナルモノ。豈是ヲ道トシ給ハンヤ」と喝破出来たのであろう。

また、『啓蒙辨』に見える漢土と我国を比較しつつ、我国の道を説く論法として参考となるのは、式部の兄弟子松岡雄淵による『日本玉璽』（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵、読点筆者）の「神道」条である。

湯武ニ至テハ一向天君ヲヒヅメテ勿論其同姓一族ノ賢者ヲモ取立ズ、自ラ帝位ニ即テ四海ヲ治ル、是天命ヲカコツケ位ヲ竊メル乱心也、然レバ聖人ト云ヘルモ日本^{ヤマトクマシイ}魂カラ見レバ乱賊ノ棟梁也、

彼国では「中」（「天命」）に「カコツケ」て君を放伐する事は是認せられるが、「日本魂」^{ヤマトクマシイ}から見れば、湯武など聖人に非ず、「乱賊ノ棟梁也」と、説明する。そうして、

彼ガ説処ノ義理ハ皆中庸ガ至極ニシテ：禪讓放伐モ変ナリノ中庸ジャトツメネバナラス、アノ様ナ道ハ我国デ道トハ云ヌ、我邦中臣之道ト申スハ中ハ君ノコト、臣ハ臣下万民ノコト：君臣一度開ケ分レテ、吾天君ノ位ノカハラザルハ万国ノ統宗ナレバナリ：又異端ト云ヘトモ此君ヲ貴ビ宝祚長久ヲ祈リ奉ル者ハ反テ我国ノ一物也、只アケクレ、ネテモサメテモ君ハ千代ニ世々ト祝シ奉ルヨリ外、我国ニ生レシ人ノ魂ハ無筈也、吾常ニ此道ニ志ス人ニ只此日本魂ヲ失ヒ玉フナト只管教^{ヒラス}ルハ此故也、

前半部は漢土の「中」「天命」と我国の「中」「君」を説き、後半部は強斎の師説に倣い、「異端ト云ヘトモ」、君の宝祚長久を祈る者とは、「日本魂」を堅持しているとした。²⁶「日本魂」「中」「心神」を实践、發揮する事で、「君臣大義」は守られよう。

神儒を学ぶ式部はかような先輩の論法をも受けた上で、儒者が普遍的と説く「天命」とそれに基づく流行の論理は、「天神ノ命」を受ける日本には当たらず、禪讓放伐も「上古ヨリ何事ト云ヲ知ラサル国風」と説くのであった。かくの如き我が「国風」を醸成したのが、皇統が神代より「万万世迄相統」いてきた歴史であり、それを示すのが「天人唯一ノ実体」である天皇に他ならない。その歴史を一貫して、君臣共につつしみながら、自らの「中」「天神ノ命」「日本魂」を護り続けてきた事で、「天位」は不易なる事を式部は確信しながら、論争に臨んでいたと考えられる。

論争に際して窺える式部の依拠したのであろう神儒の学説を検するに、山崎闇斎—正親町公通—玉木正英—松岡雄淵と継承されてきた神道に対する見識と共に、闇斎—浅見綱斎—若林強斎と師道継承された儒学の素養に基づいていた事が分かる。最後に、彼の居た環境も踏まえつつ、『啓蒙辨』に見られる時勢観を検討し、彼自身の学統意識を明らかにしよう。

四、青年時代に於ける式部の時勢観と学統認識

前掲した『啓蒙辨』に見える時勢観を再度掲げると、

「其二尊ノ御血脈万万世迄相統候故。勿論不徳之君モ有之候故。盛衰治乱モ有之候ヘトモ。冠雖レ古不レ加足。綱

常立貫候事」

国史上、「不徳之君」もあり、「盛衰治乱」があつた事実を述べ、或いは、

「中古迄ハ上古ノ風俗ニテ道行レ教モ立候得共、保元ノ乱ヨリ太平記ノ乱ヲ歴テ。漸王室衰候故」

保元平治の乱から、南北朝の騷乱を経て「王室衰候」となつた事を説く。青年時代から式部は、確かに「御血脈万万世迄相統」けども、中古以降、朝廷の不徳により国が乱れ、武家の台頭を許し、結果、「王室衰候」に至つたという時勢観を抱いていた事が分かる。

青年時代の竹内式部が神道はもとより、「垂加翁ノ於「聖学」挙テ不「棄給」という学者としての姿勢を養つたのは、望楠軒であつたと考えられる。では、青年時代の式部が抱く時勢観に同学派の与えた影響は如何であつたか。

梅津共軒の問目に若林強斎が答えた『答「梅津某問目」』（『神道大系 垂加神道（下）』所収）に於いて、強斎は「此時王室衰弱。諸侯強盛」（三九〇頁）と、「王室衰弱」を嘆いた。かような時勢観を抱く強斎は時の朝廷をして、

余リニ天孫綿々トシテ不絶コトヲ云フトテ、今ノ神道者ナド云者ガ、我国ハ神国デヤニヨツテ其筈デヤト云ガ、是ハ愚カナコトニテ候。丁度、愛宕^(註)ノ札ヲハツテ我家ハ焼ヌハツヂヤト云ニ同ジク候。イヅクンゾ湯、武アラザルコトヲ知ランヤ。…前ニモ云通り、我国ノ自慢ト云ハ、衰ヘタリト云ヘドモ、幸ニ御血脈ガタエイデ、唐ノ堯舜ノ受禪、湯武ノ放伐ノ如クナルコトナイト云迄デコソアレ、今日デハ本願寺ノ勢ホドニモナキ王室ヲイカメシ

ク云モ、片腹痛ク候。（『雑話筆記』四頁）

皇統は平々凡々に伝わってきたのではない。幸いにして堯舜の禪讓、湯武の放伐の如く、血脈が絶えてはいないが、今の朝廷（王室）は本願寺に比しても、衰えているのではない。強斎は世上を憂いつつ、観念論（愛宕ノ札ヲハツテ我家ハ焼ヌハツヂヤ）を斥け、皇統を途絶えさせる事の無い様に、君臣共に不断的の努力に努めるべき事を説く。かくの如き、強斎の時節観に基づいた学風を端的に示すものは、同学の廣木忠信が歿し、祭壇を設けて忠信の靈に対し告げられた「悲_レ今慕_レ古」（祭_ニ廣木忠信_一文）同前所収、四五七頁）の念である。これこそが浅見綱斎―強斎と継承・発展せられた望楠軒の学風であった。⁽²⁷⁾

その強斎が称美した書物の一つに、栗山潜鋒によつて著わされた『保建大記』がある。⁽²⁸⁾ 同書は保元平治の乱を論じ、朝廷衰微、道義衰廢の根本的要因が朝廷の不徳、失徳にありとし、天皇と公家に対し、国を治めるものとして修徳の大事を説いた書であつた。強斎は同書をして、「天晴ノ書ナリ」と評しているが、式部もまた、「義理を解し候ニハ手短」な書であると同時に、「先師」こと、強斎が「被_ニ用候書故_一」に、門人に同書を教授したという（『糾問次第』三三頁）。では、式部は何故、同書をして「義理を解し候ニハ手短」と感じたのか。それは、彼の居た環境が大きく作用しているのではないか。

上述した如く、式部が最終的に仕える事となつた、徳大寺家の「日に衰へ」た有様に彼は触れていた。式部は望楠軒で承けた、「悲今」の実態をここで目前とする。また、「日に衰へ」ていたのは何も徳大寺家に限らず、他の堂上方も同様であり、畢竟、「本願寺ノ勢ホドニモナキ王室」（王室衰弱）・「王室衰候」であつた。かような実態を知る事で、式部はその根本的要因を『保建大記』の内容から痛感し、結果「義理を解し候ニハ手短成」る書と感じ入つたの

ではあるまいか。まして、論争相手は「禅讓革命モ直立而不_レ動道」と強弁しており、綱齋はかような者をして「必其身ハ君ヲ弑スル筈ゾ」と警告したのである。そうした者を相手に論争を交わす式部にとっても、強齋同様、「天孫綿々トシテ不_レ絶」とは、余りに樂觀的な認識であり、無批判に断言する事は出来なかったであろう。

そうした式部の心情は「不徳之君モ有」って、国土は「盛衰治乱」に至り「保元ノ乱」を経て、「太平記ノ乱」があった国史上の事実を『啓蒙辨』で例示した事に顕れている。式部は望楠軒の学風（「悲今慕古」）や、『保建大記』の教えを承け、さらに「日に衰へ」た公家を目前とする環境下に居た事で、彼の時勢観（「王室衰候」）は形成された事が考えられる。

かくの如く、望楠軒で学問の根本を鍛え上げた式部の下には、延享三（一七四六）年より自らが仕える徳大寺実憲の息男公城が入門し、本格的に公家への講義活動を始める。式部は公城へ『伝目』（東京大学史料編纂所蔵徳大寺家本）を下し、これにそって伝授を行っていたであろう事が同所に蔵せられている『諸伝』三冊からも分かる。同時期に地下の門人に伝えていた『日蔭草』とほぼ同様の内容であるが、『諸伝 二重』の「日之少宮之伝」には『日蔭草』には見えない注意すべき記述が見える。以下に掲げると（読点筆者）、

古カラ神道ノ葬礼ハ遷宮ノ式ノ如トシテ形ハ減シテモ其神靈ハドコヘモイカフ様ハナイ、イツマテモ一ツ存スルソ、綱齋先生ヘ去者カ三浦荒二郎カモ魂カ劣ルト云、惣体アノ様ナ者モ七十五日ト云テソレ過レハ出タモノジャガ、荒二郎斗ハ久フ出ルト云コトヲ尋タレハ綱齋ノ答ニ天地間ニ三浦荒二郎ト云コトヲ知タタケハ出ヤフト申タリ、是知タト云ハ理、理ジャニヨツテソコヘ気力集ルソ、去ニヨツテ随分究理ノ学問ヲシテ理カ明ニナレハ、イツマテモ其気力生、スル、

「綱斎先生」によれば、門人の三浦荒二郎なる者が歿し、七十五日を過ぎた頃、荒二郎の神霊が現われたという。右の記述は式部が「日之少宮之伝」について分かりやすく伝える為、先輩らに聞いたであろう話を例示して説いた個所であるが、式部は強斎の師綱斎をして、「綱斎先生」と敬称を用いて呼んでいた。

前掲した尚斎の反論に対する式部の返書にも、「綱斎先生呼称并ニ説給フ処ナリ」と、綱斎の『呼称辨』によりながら主張しており、最初に送った尚斎への書簡から八年降るが、延享三（一七四六）年五月十八日付の久米訂斎宛式部書状にも、「山崎先生綱斎先生」が説かれた様に、それぞれの国に道があり、式部はそれが我が国では神道である事を弁じている（『啓蒙辨』一四頁）。この如く、式部は書としても、また口頭で行う伝授の際にも、綱斎をして「先生」と敬称を附していた。これは綱斎の存在が式部の慕う「先師」強斎の師という関係性による所が大であろう。なお、『啓蒙辨』を纏めた式部門弟は跋文（一六頁）にて、以下の様に記している。

我輩斎翁。初メ三宅重固ニ經義ヲ問侍ル時。重固翁ノ神書ヲ学ベルヲ非トシテ。一夜重固及順利（筆者注―久米訂斎）トコレヲ議論ス。然モトモドモ不_レ尽シテ後此往復之書ニ及ヘリ。翁言ヲ尽シ誠ヲ述ルトイヘトモ。二人ノ者不_レ允容_一。就中順利カ後ノ答ニアリテハ。言語ノ上ノミニシテ。鄙陋可_レ笑ノ甚キモノナリ。柳翁論辨。先賢未_レ発ノ格言ニシテ。我国学ニ功アル。禹孟ノ下ニアラス。嘗テ我友源大納言敏通卿名_一之ヲ啓蒙辨トイヘルモ真ナル哉。嗚呼重固慕_一垂加翁之聖学テ。其精力ヲ尽セル国学ニ於テハ。異端ヲ以テ見_レ之。買_レ檀_一玉ヲ反スモノ。必ス自ラ知ル処ニシテ不_レ考。遂我國ノ罪人トナル。不知之甚者也。然ハ彼ガ聖学ニ於テモ。蘊奥深味ヲ窮ムト云フヘケンヤ。

公城は尚斎が闇斎の下で、直に「聖学」(儒学)を受けたにも関わらず、儒学に於いても、闇斎の学を正確に承ける事の出来なかった人物としており、この事から、「羞斎翁」と翁に学ぶ自分達は学祖の「聖学ニ於テモ。蘊奥深味ヲ」知る者、と自認していた事が窺える。式部門弟の学統認識とは、彼らを起点に遡れば、神道は式部―玉木正英―正親町公通―山崎闇斎であり、「聖学」に於いては、式部―強斎―綱斎―闇斎となる。かような認識は式部自身の学統認識を継承したものと考えられる。

そしてその学脈に位置する者は、神道と共に「垂加翁ノ於ニ聖学ヲ挙テ不ニ棄給」(神儒兼学)事を旨とする者で、その学脈に連なる式部は神儒兼学こそが学祖の真意である事を確信していたのであろう。つまり、式部は自身が闇斎―綱斎―強斎に連なる者としての自負を持ち、先輩である尚斎―訂斎に対して、学祖の示した真意(神儒兼学)が理解出来ていない事を、「先師」に倣う様⁽³¹⁾にして、憚る事無く弁じたのである。

その後、この論争は小野鶴山の問題視するところとなり、式部は「義絶」に処された。青年時代の式部に望楠軒が与えた影響は大であり、彼にとつて望楠軒からの「義絶」とは、青天の霹靂であった事は想像に難くない。抑々、式部の学風と望楠軒との間に根本的な相違点は無く、「義絶」⁽³²⁾に処した鶴山その人も、式部の学風を問題視したのではなかった。

しかし、少壮なる式部は思いの先行する余り、闇斎の真意が神儒兼学である事を、上下の分を憚らず、先輩である尚斎―訂斎に対し、強弁した。論争相手の一人、尚斎は仮令、神道を斥けようと、綱斎に対する敬慕の念は望楠軒や式部にも劣らぬものがあり、鶴山もよくこれを承知していた事であろう。かような尚斎の意思を尊重せず、彼の非を一方的に弁ずる式部の態度に対し、鶴山は「敬」を欠いたもので、看過出来ず、「義絶」の悲劇を招くに至った。

以上の如く、青年時代の式部は神儒兼学のみならず、時勢観(「王室衰弱」)に於いても、望楠軒の学風(「悲今慕

古」を承けるものであった事が分かる。若き日に養われた式部の時勢観とは、基本的に大きく変わる事は無かった⁽³³⁾。そうした時勢観を公家も承ける事で⁽³⁴⁾、後に朝廷を揺るがす思想的背景に至ったのであろう。この点は、宝暦事件を見る上で閑却出来ない。

その式部の学統認識とは、山崎闇斎―浅見綱斎―若林強斎に連なるものと自負していた事が分かる。この学脈に伝わる神儒兼学こそが、学祖の真意であるという信念のもと、少壮なる式部は先輩であっても憚る事無く尚斎らに対し、論争を挑むのであった。

おわりに

上京後、竹内式部は母や妻の支えもあって、若林強斎、玉木正英、松岡雄淵の下で学問に沈潜した。着実に修学を進めた式部は、やがて正親町家を介して徳大寺実憲と接触したと考えられる。

その後、彼は嘗て学んだ久米訂斎と山崎闇斎の直門三宅尚斎を相手に神儒論争を交わす。この時、式部は神儒兼学の立場から、禅讓放伐を否定し、我国の道を説いた。彼の依拠する学説を検するに、式部の学問素地とは先学の指摘する如く、正英や雄淵、中でも望楠軒より形成されたものであった事が分かる。

また、青年時代の式部は既に、中古以降は「王室衰候」という時勢観を抱き、皇統も何らの苦難もなく継承されてきたという楽観的な考えを持っていなかった。かような式部の時勢観とは望楠軒の学風である「悲今慕古」と、同学派より承けたであろう栗山潜鋒『保建大記』に依拠していた事が考えられる。これらが決して空理でない事を式部が確信した背景として、早くから徳大寺家に接触していた事は閑却出来ない。「日に衰へ」た公家の姿を目前とする事で、望楠軒や『保建大記』の教えが観念的ではない、現実と歴史に依拠したものである事を式部は痛感したのであ

ろう。それ故、青年時代には既に、「王室衰候」の時勢観を抱く事となる。

青年時代の式部とは、神儒兼学と「悲今慕古」の学風に至るまで、望楠軒より承けていた。式部自身、自らの学統として闇斎―浅見綱斎―若林強斎に連なる神儒兼学の学者という認識を抱き、この学風こそが学祖の教えを真に承けたものと自認していたと考えられる。かような学統認識は弟子にも継承された。

この論争をきっかけに式部は望楠軒より「義絶」に処されるが、式部にとつては神儒兼学こそが、学祖の真意であるという信念のもとに、先輩である尚斎―訂斎らに論争を挑んだのである。言うなれば論争に於ける式部の本意とは学祖山崎闇斎の正統たらんとする強固な意志によるものであり、師説を外れて独自の説を立てようとする考えなど無かった事は間違いない。

かくの如き、青年時代の竹内式部の学風を踏まえ、その後の式部の言行を検討する事で、より式部の人物像は明らかになるのではなからうか。課題としたい。以上、諸賢の御叱声を請う。

註

- (1) 竹内式部についてはその他、内田周平「竹内式部と望楠軒との関係」(『國學院雑誌』十九―六、大正二年)、近藤啓吾「宝暦の変」(『続々山崎闇斎の研究』神道史学会、平成七年所収)、拙稿「竹内式部『奉公心得書』の成立と受容について―附・『事君弁』翻刻―」(『藝林』六七―二、平成三十年)、「竹内式部『靖献遺言講義』卷之三〈陶淵明〉について―「祖国一体」から「君臣合体」へ―」(『藝林』六八―二、令和元年)、「崎門学派に於ける実と真―竹内式部の「義絶」を通じて―」(『神道史研究』六七―二、令和元年)、「竹内式部の天皇観―桃園天皇への『日本書紀』御進講の「目的」について」(『藝林』六九―二、令和二年)、「竹内式部『中臣祓講義』について―「人欲私欲」観を中心に―」(『國學院雑誌』一二―一〇、令和二年)等を参照。

- (2) 望楠軒が式部と「義絶」に至った経過については、拙稿「崎門学派に於ける実と真」を参照せられたい。

- (3) 前掲藤田、一五頁。
- (4) 若林強斎が「垂加翁ノ常言二、易ハ唐ノ神代卷、神代卷ハ日本ノ易ジヤ、ト云サトサレシトナリ」(『雑話統録』「神道大系 垂加神道(下)」神道大系編纂会、昭和五十三年所収、一九七頁)とする如く、神道を学ぶ者にとっても、易学は重視されたいた。
- (5) 拙稿「崎門学派に於ける実と真」五六頁。
- (6) 磯前順一・小倉慈司編『近世朝廷と垂加神道(べりかん社、平成十七年)、拙稿「崎門学派に於ける実と真」五八〇九頁参照。
- (7) 前掲内田、四九頁。
- (8) 山本嘉将『香川景樹論』(育英書院、昭和十七年)九一頁、兼清正徳『人物叢書 香川景樹』(吉川弘文館、昭和四十八年)一八頁。なお、黒岩一郎「景樹の伝記」(『香川景樹の研究』文教書院、昭和三十二年所収)によれば、景樹が香川家へ養子に入る為に、口添をした人物として、後の式部門弟西洞院時名の息男信備であった事を指摘している(七五頁)。
- (9) 前掲松本参照。
- (10) 同書については皇學館大学松本丘先生より複写を御提供いただいた。記して御礼申し上げます。
- (11) この式部の姿勢とは、『拘幽操』を講じた浅見綱斎が「忠ハ中心トカクモ、ドコデモ君ガ大切デナラヌト云フ本心ノヤムニヤマレヌ意味カラノコトゾ。コ、ヲ目アテトセネバ、一人扶持トル者モ、ドウモ奉公ハナラス」(『拘幽操師説』近藤啓吾・金本正孝編『浅見綱斎集』国書刊行会、平成元年所収、六七二頁)と、する教えに依拠しているのであろう。
- (12) 前掲松本、二五二頁。
- (13) 『黙識録』(松雲堂、昭和八年)。
- (14) 同右。
- (15) 近藤啓吾『浅見綱斎の研究』(神道史学会、昭和四十五年)九七〇九九頁参照。
- (16) 尚斎が京都移住後に手厚く指導を受けたのは綱斎であり、彼の奨めによつて「尚斎」を名乗った(吉田健舟・海老田輝巳『佐藤直方 三宅尚斎』明徳出版社、平成二年参照)。「黙識録」には「辛亥(筆者註―享保元年か)十月二十五日。夜夢見綱斎先生。先生曰。予四十年來。持一敬字」と夢にまで「綱斎先生」が現れ、教えを受けた事を見れば、彼が綱斎を篤く敬慕していた事が分かる。
- (17) 綱斎の学脈を承けた望楠軒と尚斎とが、比較的近い関係であったからこそ、尚斎の高弟で崎門学派の先輩にあたる久米訂斎に、山本復斎の息男を望楠軒は預けたのであろう(拙稿「崎門学派に於ける実と真」、六四〇六五頁)。

(18) なお、強斎と三宅尚斎とは師説継承を巡り、「絶交」に至っている。ただし、強斎に先輩を批判する意思は無く、尚斎からの「絶交」は思いがけぬもので、反省していた（近藤啓吾「洪範全書統録をめぐるて」『若林強斎の研究』神道史学会、昭和五十四年所収参照）。

(19) 『尚斎先生雑談録』（国立国会図書館所蔵、読点筆者）享保十五年六月二十五日条によれば、「綱斎先生神書ハ一吟味セネバナラスモノゾ、ヲレガ神道ヲキケバトント聖人ノ道ニカハルコトハ無ナリ、然レドモワケノアルコトト云レタヒトドモ、ツイニキカナンダナリ、若年ノ時分山崎先生モキカレタ聞書アツテ、ソレガ若林氏ヘ伝テソレヲ玉本草斎ヘ見セラレレバ、コレ程大切ナ書ハナシ、写シタシト有テ写シオカレテ若林玉木両氏ノ外ニハナキヨシト咄シテ然レバ綱斎先生モ晩年ハカウ云レタトミエル；我聖人ノ書デ事足レバ少テモ紛ラハシキコトラスルト後世ノ迷ヒニナル、カウ云ト山崎先生ヲ打ヤブルニナルデ氣ノ毒ナレドモ大ナルツイヘラ開クヤウナコトハセヌガヨキゾ」とある如く、晩年の綱斎が神道に傾倒していた事は尚斎も知っていた。この事については綱斎をも批判する様で氣の毒だが、「聖人ノ書」で事足りるにも関わらず、紛らわしい事に力を浪費するのは後世の同学にとっても迷いとなり、やらぬ方が良く尚斎はいう。ただし、最晩年の綱斎は「嘉右衛門殿ノ落穂ヲヒラフ」（『雑話筆記』『神道大系垂加神道（下）』所収、七四頁）べく、神道修学に励んだ如くであり、この「微意」を受けたのが強斎であった。

(20) 嘉点『中庸或問』（早稲田大学図書館所蔵）にて、「古先聖王之所_レ以迎_レ日ヲ推_レ筭ヲ領_レ朔ヲ授_レ民_ニ。而其_ニ大_ニ至_ニ於禪授放伐_ニ。各以_{スル}其_ノ時_ヲ者_ヲ皆律_ル三天_ニ時_ニ之事也」とある如く、「禪授放伐」は「天」の下した命（「性」「中」）を「聖王」が時事に応じて、従った結果であるという。

(21) 『答跡部良賢門目』（『近世社会経済学説大系 浅見綱斎集』誠文堂新光社、昭和十四年所収）二八二―二八三頁。

(22) 『尚斎先生雑談録』享保十七年三月二十五日条には、「綱斎先生ノ門人神道ヲ吟味セネバナヌ様ニ云ユエ静斎ニ問タレバ綱斎ノ死ル、時、若キモノハ神道ヲモ吟味セヨト云レタト、此一言ヨリアノ如ク誤リ来レリ」と、綱斎の学脈を受ける者が挙って神道を学ぶ所以を強斎門弟の小林静斎に問うたところ、綱斎の遺命である事を知り、これによって「誤リ」が起きたのだと嘆く。壮年の綱斎から感化を受けた尚斎、晩年の綱斎から感化を受けた強斎とで、学風を異としたのは、闇斎が「儒教、神道とたどった思想の遍歴、いひかへれば、その内面に於ける思想の転回に伴ふ相克の跡は、門下が、闇斎のどの時点の思想を継承したかといふ問題に伴つて、当然、門流間の対立論争といふ形で、再び繰返されることとなつた」（『前掲近藤「洪範全書統録をめぐるて」二四三頁）のと同義であらう。

- (23) 綱齋の学問からの影響については、拙稿「竹内式部『靖献遺言講義』卷之三〈陶淵明〉について」を参照せられたい。
- (24) 垂加神道に於ける「心神」論は近藤啓吾「心神考―三輪大神と山崎闇齋」(『山崎闇齋の研究』神道史学会、昭和六十一年所収)、西岡和彦「山崎闇齋と三輪」(『大美和』一三三、平成二十九年)等を参照。
- (25) 拙稿「竹内式部『靖献遺言講義』卷之三〈陶淵明〉について」を参照せられたい。
- (26) 『日本玉霊』「神道」条は後に『神道学則日本魂』(附録「学則問答」として挿入された。西田長男「近世における日本魂論の源流」(『日本神道史研究』七、講談社、昭和五十三年所収)によれば、『日本玉霊』の成立とは享保十五年五月十八日から享保十六年秋までに著されたものという。同書奥付によれば、雄淵の弟子須部玄仙の録したものを式部の畏友谷川士清が写したものである。当時の雄淵に従学した者は彼の「日本魂」論に感銘を受けており、同時期に彼らと学んでいた式部も例外では無かろう。なお、式部への「日本魂」論の継承については拙稿同右二二六―二二八頁参照。
- (27) 前掲近藤「若林強齋の研究」参照。
- (28) 『保建大記』については、松本丘「尚仁親王と栗山潜鋒」(神道史学会、平成十六年)等を参照。
- (29) 『雑話統録』一七五頁。
- (30) 式部は強齋亡き後、彼を「先師」と呼び、またその祠堂への拝礼を強齋の女婿で望楠軒講主を継いだ小野鶴山へ願い出ており、式部が強齋を慕っていた事は間違いない(前掲内田参照)。
- (31) 註(18)参照。
- (32) 近藤啓吾「小野鶴山の『孟子講義』」(『小野鶴山の研究』神道史学会、平成十四年所収)に明らかな如く、禪讓放伐を否定する姿勢は、闇齋―綱齋―強齋の学脈に位置する式部と鶴山との間に相違点など無かった。
- (33) 註(1) 拙稿諸研究を参照せられたい。
- (34) 実際、後に徳大寺公城が桃園天皇に命に応じて編纂した『進講筆記』では幕府に対し、朝廷が衰微した事を公城は嘆いており、その根本的要因が公家や天皇にある事を諫言している(『竹内式部の天皇観』一一四、一一九頁参照)。